

研究課題	ICT を活用したいいつでもどこでも学びの場づくり
副題	～小学生がつくるつながりと 学びのあるまちへのアプローチ～
キーワード	つながり 学び SDGs まちづくり
学校名	世田谷区立尾山台小学校
所在地	〒158-0086 東京都世田谷区尾山台3-11-1
ホームページ アドレス	http://school.setagaya.ed.jp/oi

1. 研究の背景

本校のすぐそばにある商店街や学校の周りの地域は、本校との繋がりが深く、長い間学校教育を支えてきていただいた。新学習指導要領が公示された今、これからの時代を生きる子どもたちは、社会や世界と関わりながら自らの人生を切り拓いていく必要がある。本校においては「社会に開かれた教育課程」を実現すべく、新しい時代に求められる資質や能力を育むための学びの場を地域に求めようとしている。しかし、時代の流れにより商店街そのものの存在価値の見直しが迫られる時期が来ており、新しい価値を創造する必要性が生まれている。また地域の方からは、町会に入らない若い世代の方たちが多く、地域のつながりが薄れていると伺っている。

本校において行ったワークショップでは、世代を超えて多くの方たちが、新しい商店街の在り方を考えること、地域の繋がりの新しい価値を模索していること、地域の昔を懐かしむ気持ちが強いこと、そしてその歴史を残したいと考えていること、小・中学生などの次代を担う子どもたちとの関わりを求めていることなどが分かった。

そこで本校では、生涯に渡り互いに学び合える「学びの場づくり」を地域や商店街、企業、近隣の大学とともに進めるとともに、商店街や地域の未来を考え、新しい商店街、地域づくりの第一歩として新しい仕組みをつくることを目指すこととした。

2. 研究の目的

尾山台小学校は、「地域運営学校」として平成30年に6年目を迎えた。開かれた学校を目指し、学校運営委員会とともにビジョンを作成し進めてきた。協力的な地域に恵まれ、商店街調べ、地域巡り、安全マップ作りなどを地域の協力を得て行っている。しかし、例年と同じことを繰り返すだけでは、学校からの一方通行なのではないかと思い始め、「社会に開かれた学校」をめざしその方法を模索していた。同じ頃、近隣の商店街の方からは商店街が様変わりしつつあること、商店街の未来について考えたいと伺った。

そこで、小学校、商店街、地域、大学等とプロジェクト（おやまちプロジェクト）を組んで、地域と小学校、近隣の大学とともに、「学び」と「つながり」のあるまちづくりをめざし、活動を開始することとした。

本校の中では、目標を①視野を広げる－今までの教育をそのまま続けていくのではなく、地域とともに子どもたちが大人になるときに必要な力をはぐくむ ②教育課程の中で行う－「社会に開かれた教育課程」として教育課程の中で子どもたちに身に付けたい力をはぐくむ ③教育目標を大切にしながら、地域と共有する－地域の特性を考えながら、本校が目指すことと地域の願いを融合させる この3点を設定した。

まず実験的な取組として、平成 29 年 2 月、3 月と地域の方々とともにワークショップを行い、活動のめあてを確認した。そして、平成 29 年 3 月に地域と子どもたちがともに学ぶ試みとして「おやまちデザインプロジェクト『今昔写真物語－50 年の時を超えた撮影会』」を開催した。町に出て撮ってきた写真をもとにグループ毎に地域の変化の様子を発表するというものであったが、地域の方々は子どもたちとともに活動を行うことで、臆することなく自分の考えを伝え、活発な会となった。

これから、小学校・商店街・地域・大学が連携し、町全体を「学び」と「つながり」のあるまちとし、新しい商店街や地域の在り方を考えていくという意義と理解をしていただけるきっかけとなった。

地域の方々に本取組の意義を理解していただき協力者を増やすとともに、本校の子どもたちに、地域の中で学ぶ意識を醸成させていくことを本研究の目的とする。

(※おやまちとは尾山台周辺の町の総称である)



3. 研究の経過

時期	取組内容	評価のための記録
3月8日	おやまちデザインプロジェクト	観察記録 写真・VTR 振り返りシート（児童・地域）
4月	第1回コアメンバーミーティング	指導・助言（アドバイザー）
5月	まち探検	振り返りカード（児童） 児童聞き取り調査
6月	第2回コアメンバーミーティング	指導・助言（アドバイザー）
7月	おやまちサロン「地域でつくる放課後とは」	アンケート調査（参加者）
8月	サマーワークショップ	アンケート調査（児童） アンケート調査（ゲスト）
9月	笑顔の秘密探検隊（商店街調べ） おやまちサロン「SDG s 入門トーク」	振り返りカード（児童） 児童聞き取り調査
10月	おやまちサロン「もっとみんながつながるまちへ」	アンケート調査（参加者）
11月	リアル職業調べ	アンケート調査（児童） 振り返りカード（児童） アンケート調査（ゲスト）
12月	第3回コアメンバーミーティング	指導・助言（アドバイザー）
1月	SDG s 事前学習	アンケート調査（児童）
2月	SDG s 子どもたちまちへ	アンケート調査（児童） 写真・VTR 児童聞き取り調査
3月	第4回コアメンバーミーティング 活動の振り返り・次年度の計画	指導・助言（アドバイザー）

4. 代表的な実践

- (1) おやまちサロン 第2回「SDGs 入門トーク」
 平成30年7月26日(木) 場所: Fluss
 講師: 一般社団法人 Think the Earth 笹尾実和子氏

おやまちサロンは、地域の方たちに、現代的な課題や学校の教育について理解していただくことを目的にして開催した。2回目の「SDGs 入門トーク」は、子どもたちがまちに調査活動に出るために、地域の方に理解をしていただきたいと考えて開催した。他にも、第1回「地域でつくる放課後とは」第3回「もっとみんながつながるまちへ」を開催した。これ以降サロンの内容は多岐に渡り、参加者は広がりを見せている。



- (2) 6年生 理科 「人と環境」(全4時間)「総合」「SDG s これからの生き方について考えよう」
 (全8時間) 平成31年2月25日(月)

昨年は、第1回目としておやまちデザインプロジェクト『今昔写真物語-50年の時を超えた撮影会』を開催した。第2回目の今年度は、「SDGs」をテーマに選び、まちの人とともに2030年までに国連が定めた17の目標について理解し、世界の入口はすぐ身近にあることを子どもたちに理解させることを目標にした。

1	SDGsについて知ろう	◎「SDG s」という考え方について理解する ○2030年までに、先進国も新興国も途上国も、国も企業もNPOも個人も、あらゆる垣根を越えて協力し、よりよい未来を創るための、国連で決まった17個の目標がある。	SDG sの理念は押さえつつも、今回は、この単元と直接結びつきにくい目標に関しては扱わないこととする。17のパートナーシップについては、ある意味様々な分野に共通するものであることに留意して指導に当たる。	
2		◎自分が追究したい課題を設定する ○7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに 1 1 住み続けられるまちづくりを 1 2 つくる責任 つかう責任 1 3 気候変動に具体的な対策を 1 4 海の豊かさを守ろう 1 7 パートナーシップで目標を達成しよう 内のどれかを選び、追究したい課題を設定する。		
3		◎自分の課題に対する現代社会の課題を整理する ○自分の選んだ課題に対して、現代社会ではどのようなことが課題となっているのか、インターネットや書籍(未来を変える目標SDG s アイデアブック)を利用して調べる。		追究課題が共通する者同士でグループを作り、学習内容に格差が出にくいようにする。
4				
5		◎実際の町の様子を調べ、適切に情報を集める 【調査方法】 ・町の人から話を聞く。 ・町の様子を写真で撮る。 ○人々の工夫、人々の思いや願い、具体策、逆の発想としてまだ改善が行き届いていない部分、などを実際に見聞きして確かめる。		2月25日(月)に実施する。
6				

7	◎調べた情報を、視点を定めて整理する ○学習課題「環境問題が明確で深刻な世界で、これからのように生きていくべきか」の解決に向けて、集めた情報をキーワード化し、ランキング形式にしてまとめる。	
8	◎整理したことをもとに、これからの生き方について考える ○前時のランキングをもとにして、自分の考え方を形成する。	

町の人に話を聞き、その後に、SDGsについて自分たちの目で見て、探して写真を撮るといった活動を行った。おやまちサロンでSDGsのことを学んでいた町の人からの話はスムーズで、子どもたちの理解も進んだようであった。

子どもたちからは、「いつも見てるところでも意識するとたくさんのSDGsにつながる発見があった」「まちの人たちがこんなに気をつけているのは知らなかった」などの感想が聞かれた。

今回は、SDGsについて、子どもと大人がともに学んだ。他にも教育課程の中で地域の方とともに学び、フィールドワークができそうなことがたくさんあると感じている。



5. 研究の成果

(1) 児童の変容

①自分が住んでいるまちについて理解の向上

本来「学び」というものは、生活と結びついて初めて実際に使える力になる。まとめのグループシートから子どもたちは次のような感想をもったことがわかる。「ぼくは、最近できた目標なので、まだ見られないと思っていました。しかし町中にあふれるくらいにたくさんのもの



ころにSDGsがひそんでいました。でも、まだ町には悪いところもあり、私たちがよい町づくりをしなければならないと思いました」「尾山台は住みよい町だと改めて思った。商店街の方たちもたくさん配慮をしていることがわかった。私たちもSDGsのために行動しなければと思った」

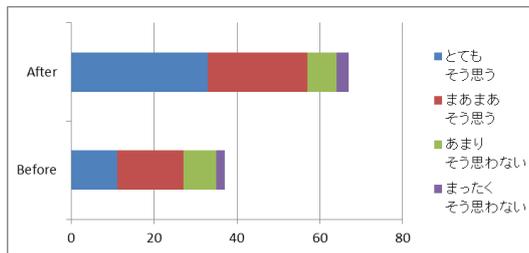
このように、自分の身の回りにも、17の目標に合致することがあることに気づき、世界全体の目標はすぐ身近にあることに気付いている。

②数値による児童の変容

子どもたちに、調査活動の前後で16項目のアンケートを行った。いくつかを抜粋する。

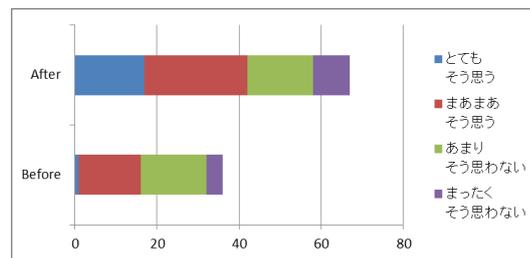
◆地域の人たちは、自分に様々なことを教えてくれると思う。

地域の人たちは、自分に様々なことを教えてくれると思う。		Before		After	
		回答数	回答数における割合	回答数	回答数における割合
設問12	とても そう思う	11	29.73%	33	49.25%
	まあまあ そう思う	16	43.24%	24	35.82%
	あまり そう思わない	8	21.62%	7	10.45%
	まったく そう思わない	2	5.41%	3	4.48%



◆自分が住む地域の人たちが行っている仕事に興味をもっている。

自分が住む地域の人たちが行っている仕事に興味をもっている。		Before		After	
		回答数	回答数における割合	回答数	回答数における割合
設問13	とても そう思う	1	2.70%	17	25.37%
	まあまあ そう思う	15	40.54%	25	37.31%
	あまり そう思わない	16	43.24%	16	23.88%
	まったく そう思わない	4	10.81%	9	13.43%

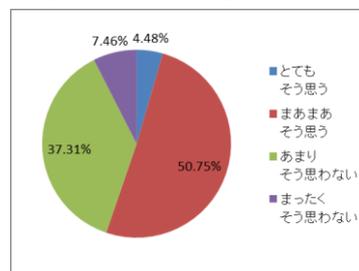


活動の前には、地域の方々と地域活動などで会い挨拶を交わすことがあっても、それほど深いかかわりはなかったのだろう。それが、SDGsを調べるという活動を通して環境や福祉などに配慮した仕事の仕方に触れ興味をもったことが分かる。

◆自分は住んでいる地域の役に立っていると思う。

自分は、住んでいる地域の役に立っていると思う。		Before		After	
		回答数	回答数における割合	回答数	回答数における割合
設問15	とても そう思う	5	13.51%	3	4.48%
	まあまあ そう思う	12	32.43%	34	50.75%
	あまり そう思わない	18	48.65%	25	37.31%
	まったく そう思わない	2	5.41%	5	7.46%

【after データ】



「自分が地域の役に立っていると思う」の調査では、「とてもそう思う」が他に比べて極端に少ない。地域の方から「未来の希望として元気をもらっている」などの声はいただくが、子どもたち自身が、清掃や挨拶活動などで役に立っていると実感させることも必要であろうと感じた。

(2) 地域の協力者の増加

商店街理事の方、小学校校長、大学教授・准教授と初めは4人の発起人で始めたプロジェクトであったが、コアメンバーが7人、地域の方、大学生などを集めると約20人が中心になって活動するようになった。それにつれて、活動も活発化し、参加者が増え、ワークショップやサロンは参加者が60名から100名にも上る。これは大きな成果と言える。

6. 今後の課題・展望

今回のプロジェクトの活動を通して、ある程度の協力者が増え、子どもたちにとっても地域の中で学ぶ意識は進んだと考えられる。今後は、教育課程の中に位置付けられる活動を洗い出し、効果的なものを選び出し、子どもと地域の方がともに学ぶ場を設定していきたい。

更にこの活動のねらいは、「つながり」と「学び」のあるまちづくりにある。

イベントに参加をするだけでなく、この活動の意義を理解し、中心になって活動できる地域人材を増やすことが必要である。今後は、地域の方にこの意識を醸成させることも目的としたい。

今回は、地域の方の意識調査は、聞き取り調査のみ行った。地域の方々は、口々に子どもたちにかかわる楽しさやともに学ぶ意義をおっしゃってくださったが、今後は紙面調査も行い、地域の方々の理解度を数値的に把握することが必要であると考えている。

7. おわりに

「おやまちプロジェクト」は長期的に考えた目標に向かい進んでいくプロジェクトである。手探り状態で始めた初期のころから比べると、「子ども食堂」「おやまちベース（活動拠点）」「歩行者天国の活動」「おやまちシンポジウム」と活動は広がりを見せている。小学校で行っているワークショップは、岡山県立津山商業高校との連携で、高校生のリーダーシップにより歩行者天国の時間帯に「商い」体験を行い大賑わいとなった。この活動の広がりを良い方向へもっていくようねらいをはっきりとさせ地域に浸透させていくことが必要であろう。

また、途中から大学生が参加したことで、活動に勢いが見られるようになった。今後は、大学生たちの卒論等の研究テーマとしてこの「おやまち」の活動が取り上げられるようになるなど、大学生にとっても意義がある活動にできると、長期にわたり活動が継続できると考えている。

この研究を進めるにあたりアドバイザーの方には、多方面からご指導をいただき軌道修正することができました。また、パナソニック教育財団事務局の方々には、この研究の推進管理に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

8. 参考文献

- ・一般社団法人 Think the Earth 監修 蟹江憲史
「未来を変える目標 SDGs アイデアブック」